

つて居ないからであらう。

其の五は、精神活動ミ筋肉活動ミよく調和がされて居るか否かミ言ふ事を見た。これは其の二の運動を行はしめる場合、紅白の鞠を紅又は白ミ教師の方から指示して見たり、其の四の運動の時左の片足で飛んで行けミ命じたり、右の片足で飛べミ命じたりしたのである。紅白や左右が直覺的に頭に浮ぶ幼児は、この調査に合格するわけで、然らざるものはまつたくかまわずに、投げたり、飛んだりするのである。この點は概して無頓著であるのに驚かされた。

以上の如き方法によつてフィジカルテストを行つたのであるが、これミ連關して考へなければならぬ事は、醫師の身體検査であるが、この點は醫學の方面から論ずるのであるから言ふ事をやめて置かう。然し、附屬小學校の如き所では身體の弱なものなるべく入學をさげさせて居る。これは學校の性質上止むを得ない。そこでフィジカルテストの後、醫師の診察表を見て、まづさしつかへないものから考へて行つたのである。

入學檢定の所感

堀 七 藏

本年の入學志望者は昨年よりも多少多かつた。昨年は第一部女兒が四百三十三人であつたが、今年には四百五十一人であつた。また昨年第二部女兒が三百三十四人であつたのが、本年は二百九十人であつた。尚ほ第二部男兒は昨年九十人であつたのが、本年は八十四人であつた。この外に附屬幼稚園より抽籤も檢定もなく第一部に入學する女兒が二十二人(附屬

幼稚園第一部保育修了者あり、また無抽籤で検定を受けるもの男兒四十三人(附屬幼稚園第一部第二部の男兒)女兒十五人(附屬幼稚園第二部の女兒)であつた。

そこで第一部女兒では抽籤の結果第一番より第七十番までを検定候補者き定めたのであるが抽籤缺席者のため検定實数は六十七人になつたのである。また第二部男兒では抽籤により第一番より第三十番までを検定候補者きなり、更に附屬幼稚園よりの無抽籤検定候補者を合し、検定實数は六十三人になつた。そして第二部女兒では抽籤により第一番より第三十番までを検定候補者きなし、更に附屬幼稚園よりの無抽籤にて検定を受けるものを加へて検定實数は三十四人になつたのである。

かくて第一部女兒に於ては検定の結果六十七人中より二十六人を入學者き決定し、第二部女兒では三十四人中より十二人を入學者き決定し、男兒は六十三人中より十二人を入學者き決定したのである。

二

私は専ら総合的に検定したのであるが、その検定の材料としては刷毛、櫛、鏡、ナイフ、松の葉、椿の葉、山登りの人形、ペンシペン軸等につき、その名稱を尋ね「何をするものか」「どうしてそんなこみが分るか」「こいふやうに尋ねて兒童の判斷を行はしめ、その間に兒童の精神發達を考察した。

殊に「山登りの人形」について「何をしてゐるこころか」、「どうして分るか」を尋ねたのであるが、山へ登る人き答へるものは相當多かつたのである。しかし全く見當はずれのこみを答へるものがある。

これは親よりの急な入れ智恵のためであるこみが明白である。また幼稚園で器械的なテストの練習をしたものではないかき推定せられるものも少数はあつたやうである。兒童の精神發達を檢定するこみは大人よりの注入した知識の分量を調

査するものでないこゝを保護者でも保母でも十分考へねばならぬ。幼児を保育して幼児を急速に物知りこゝなすのではなく、眞に幼児の智能が発達するやうにせねばならぬ。家庭教育に於ても亦同様でなくてはならぬ。

「どうして山に登るこゝが分るか」こゝいふ問に對して、「リックサックをかついでゐるから」こゝ答へたものには、「それがリックサックか」、「何が入つてゐるものか」、「何にするものか」こゝ尋ねたのである。これらの間に明白に答へる兒童は明白な觀念をもつてゐる兒童である。男兒にも女兒にも、この頃は中々よくリックサックを觀察してゐるものが多いのに驚いた。また「荷物をかついで杖をついでゐるから山登りだ」こゝ判定するものもあつた。しかし「それは人」、「それはおぢいさん」こゝ單に答へるだけのものも少くない。全く「知らない」「こゝいふものは少かつたが」「どうして分るか」の問に對しては

「どうしてでも」こゝいふものが少くない。何であるこゝ直覺的に判斷するがその理由なり證據なりを明白にいふこゝが出来ないものである。

三

更に「この繪をよく御覽なさい」こゝいつて、「この兒は何をしてゐるの？」こゝ尋ねて見ました。「この兒は」こゝ指したのは向つて左の兒で、エプロパンツをはいた兒で眞中の兒にさゝやいてゐるのである。この答には中々面白いのが多い。「遊んでゐるの」こゝいふものもあれば、「犬を引ばつてゐるの」こゝ答へるものさへある。しかし多くは「ないしよばなしをしてゐるの」、或は「はなしをしてゐるの」こゝ答へるものが多い。「どうしてないしよばなしをしてゐるこゝが分りますか」こゝ尋ねるこゝ、手眞似をなすものが



あり、手をあてゝゐるから、「耳のまごころへいつてゐるから」を答へるものが相當あります。「この兒は何してゐるか」をいつて右の兒について尋ねるを「遊んでゐるの」にだけしか答へない。この繪は大人から見るに相當子供の生活を面白く表現してゐるのであるからまごころまで子供がよく判断するかを檢したのである。

四

次に蝶の三色版を示し、「これは何ですか」を先づ尋ねました。「てふく」を答へないものはない。そこで「この蝶まごころの蝶まごころが違ひますか」を尋ねて見ました。男兒の大部分は先づ「色がちがふ」を答へたが、女兒は色のまごころを第二番目に答へるものが多い。それで女兒は先づ「翅の形がちがふ」をいふものが多いまごころは一寸奇異であります。しかし女兒では觸角（子併は凡てひげまごころ）がちがふまごころをいつたものが極く稀であるが、男兒には相當多かつたのであります。殊に細かな點まで相異點をいくつも列擧するまごころは男兒の特色であります。これは繪について男兒は一般に注意して觀察するが、女兒の方はよく観ないで答へるものがあります。一ついへば「それから」をいふのでいへるだけいさせて見るに、男兒の中には五つも六つも相異點を列擧するものがあります。餘程細かい點まで觀察するものであります。觀念に觀念に於いてその相異點をいはせるの異り、繪についての相異點であるから容易なのであります。

觀察のまごころ繪を使ふならば、「これは何してゐるまごころ」、「いく人ゐますか」、「この人は何をするまごころか」、「どうしてそれが分るか」、「これにこれまごころがちがふか」、「どんなにちがふか」をいふやうに、いろいろに問答するまごころは家庭教育に於ても幼稚園保育に於ても至極大切なまごころであります。かくするまごころによつて幼兒の觀察力を養ふまごころが出来るし、事物の觀念が明白になり、殊に數や色彩、形體の觀念等が明白になります。數觀念は實物や繪を數へるまごころによりて發達するものであります。また教師が親がいろいろの問を出して幼兒に答へしめるまごころは幼兒の言語練習になり言語發表

の練習となり、甚だ重要な保育手段であります。「お話をして御覽」といつても、幼児にはとても出来ないものであるが、いろくの事物について觀察せしめつゝ教師の問に答へさせるやうにすれば直に言語練習となり發表の練習となるのであります。

五

本年の入學檢定に於ては一般的に幼稚園から來たものでも直接家庭から來たものでも、入學準備としてテストの練習を行つた跡の見えるものが多かつたやうであります。しかし眞の幼児の發達を檢する上に於て却つて妨害となり、却つて幼兒の眞價を發揮しないものも少くないやうに見受けられたのであります。親や保母から教はつた通りに答へて、こちらが尋ねないこゝに答へるものさへあるさいふ有様であります。しかし近時幼稚園保育を受けてゐる爲めか、檢定に出るこゝに泣くものが少くなつたのは事實であります。こゝろが今年の檢定に於て途中で小便をもらすものが女兒に數人あつたこゝも注意すべき點であり、兎角幼兒の身體方面の保育に不十分な點がありはしないかと思はれる節々もありました。是等は幼稚園保育に於ては特に注意すべき點でありませう。保育に於て知識の注入に氣をこられ、幼兒の身體を輕視するやうなこゝがあればそれは甚だよくないこゝであります。